

# 岡本かの子「河明り」―「娘」とのつながりを経た「私」の再選択―

亀井 梓

## 一、はじめに

岡本かの子の遺稿「河明り」は一九三九年に『中央公論』四月号にて掲載された作品である。<sup>①</sup>本作は作家である「私」が川沿いの家を借りる場面に始まり、その後舞台はシンガポールへ移る。そして再度「私」が小説執筆へと向き合う作品である。

本作の先行論を確認すると「南進」への志向や、「龍宮」伝説を元にした宗教的要素、<sup>②</sup>芸術家小説という視点での読みが多くなされてきた。そのような中で特に異彩を放つものとして高良留美子の論が挙げられる。<sup>③</sup>同論では「私」が「娘」と関わる中で「家父長制家族」からの「娘」の救出を目指しつつも、それが達成されなかったものとして示されている。同論の指摘をもとに「家制度」という観点から本作を見直すと、まず「私」の「母」の存在の希薄さに気付く。一方で「私」と「叔母」の関係については多く描かれている。<sup>④</sup>しかしながら、先行論において「叔母」に関して論じられてくることはほぼなかった。本稿では中心人物である「私」と「娘」に加え「私」の「叔母」にも焦点を当て、三者の類似点と相違点を洗い出す。そこから三者がどのような特徴を持ち、何を重視するのかを確認する。そして「私」が「娘」と関わることで生じていく変化を順に追いながら確認していき、物語後半部の「私」が再度執筆へと向かう姿勢の変化を読み解く。

## 二、「私」と「叔母」の関係性

「河明り」は作家である「私」が執筆する物語における娘の性格の不足部分を見出すために、川のほとりで過ごそうとする場面から始まる。

「私」は貸し部屋を管理する「娘」との出会い頭から、彼女に強く惹かれていることが描かれている。ここでの「私」は「出て来た娘を私はあまりの美しさにまじまじと見詰めてしまった。」とあるように「娘」の外見と、「この娘には女と女と出会って、すぐ探り合うあの鉤針のような何ものもない。そして、私を気易くしたのは、この娘が自分で自分の美しさを意識して所作する二重なものを持たないらしい気配いである。そのことは一目で女には判る。」といった彼女の内面の両方に関心を抱いている。

ここで注目したいのが傍線部の「女と女と出会って」や「女には判る」という箇所である。つまり「娘」と接する「私」は、「女」の作家であるがゆえに「女」である「娘」を理解できるといふ自負があるということである。そのため、後の場面でも「私」は「娘」の内と外の二つの矛盾が気になっている。そして「毎日川沿いの部屋へ通」い始めてからも「私」は「女」であることを意識しながら「娘」を眺めている。

何という不思議なこの家の娘であろう。この娘には一光閃も、一陰翳もない。ただ寂しいと云えばあまりに爛漫として美しく咲き乱れ、そしてびしびし働いている。(中略)内にも外にも虚白なもの感じられるのを、却って同じ女としての私が無関心でいられる筈がなかった。

「私」が「娘」に「関心」を寄せる要因の一つに「書き続けている物語の中の主要人物の娘の性格」に不足している部分があることを考えあぐねていることが挙げられる。そのため、「私」は出会った「娘」に対しても、「女」の視点から観察していると言える。「娘」との出会いの場面でも「私」は自身の考える「年頃の娘」像に当てはまらない「娘」に対して以下のような異様さを感じている。

私はその娘の身なりは別に普通の年頃の娘と違っていないが、じかに身につけているものに、茶絹で拵らえて、手首まで覆っている肌襦衣のようなものなの、脛にぴっちりついている裾裏と共色の股引を穿いているのを異様に思った。

私がそれ等に気がついたと見て取ると、娘は、

「変つて居りました。なにしろ男の中に立ち混つて働くのですから、ちと武装しておりますね」

このように、身なりは「普通の年頃の娘」ではあるものの、肌襦衣や股引をじかに身につけている点が「普通の年頃の娘」では考えられないと「私」は見ている。この場面からも「私」は「娘」に年頃の女性らしさが希薄であることに気付く事ができる。「女」の視点を持った作家であると言えよう。これは「娘」がこの近所において「亀島河岸のモダン乙姫」と称され、あくまで近所では「今風な年頃の若い娘」という表面的な捉えられ方にとどまっているのと比べても対照的である。加えて店に仕え、「娘」と近くで接している小女のやまも「お嬢さんはどういう方」という「私」の問いかけに対し、難しい試験問題のように考えた結果としても「あれきりの方でございましょう。」といった答えにとどまっております、「娘」に対する深い理解を持ち合わせているようには見えない。これらのことから、「私」は「娘」

の内面に寄り添った見方が周囲の人物よりできることは明白である。

つまり、「私」は作家であり加えて「女」であるがために、同じ「女」に対して深い理解が可能であったと言えるだろう。このような作家であり「女」であるという意識は「叔母」との対話の場面でもうかがえる。

この叔母は、私の生家の直系では一粒種の私が、結婚を避け、文筆を執ることを散々嘆いた末、遂に私の意志の曲げ難いを見て取り、せめて文筆の道で、生家の名跡を遺さしたいと、私を策励しかかっているのだった。

「私」が身の上を振り返る中で、「一粒種の私が、結婚を避け」と示されているように生家直系の「女」であることへの意識が描かれている。現状としての「私」は「文筆」を選び、結婚を避けた女である。しかし、「私」は「叔母」と口争いをしながらも、「それを有難いと思って、享け入れて」いる。このことから、「私」も「叔母」とある程度は考えを共有する部分があるとも言えるだろう。さらに「生家直系」という言葉を「私」自身が文中にあえて組み込んでいることから、そこに何らかの意識があることが分かる。

しかしながら「叔母」は「私」とは異なり、家の名跡を残すことにより重きを置いており、そのため「文筆での成功」はあくまで名跡を残すという目的への代替案に過ぎないという考えである。

ここで一度本作における「叔母」に関する情報を整理する。本作冒頭において「私は叔母と共に住む家庭の日常生活を普通に送り」との記述があり、「私」と「叔母」は共に住んでいることがわかる。加えて「私の生家の直系では一粒種の私」という描写から「叔母」には子どもがいなくてもわかる。「叔母」の婚姻関係については具体的な記述がないため不明である。「叔母」の職業についてだが、若い頃は「藩侯夫人の女秘書」であったことがシンガポールに向

かう場面にて示されている。

——少し当惑しているとき思いの外力になったのは叔母である。娘のとき藩侯夫人の女秘書のようなことをして、藩侯夫妻が歐洲の公使に赴任するとき伴われ、それから帰りには世界の国々をも廻つて来た女だけに、自分の畑へ水を引くように、私を励ました。

「あんたも一遍そのくらいのところへ行つていらつしやい。すると世間も広くなつて、もつと私と話が合うようになりますから」

それから、女二人の旅券だの船だの信用状だのを、自分一人で掻き込むようにして埒を開け、神戸まで見送つて呉れた。

ここでの「叔母」の言葉は「海外をみることで世間が広くなり、自分とも話が合うようになる。」という意味にとれる。しかし、一方では「娘」と木下の間を取り持つために海外へ行くという「保護者的役割」を「私」が経験することを勧めているようにも読み取ることができる。つまり、「叔母」は「私」が「保護者的役割」を担い年少者をサポートする経験が不足しているがゆえに、「私」と話が合わない部分があると述べているとも言えるのだ。「私」は結婚をしていないため「子ども」はいないと想定される。そのため「保護者的役割」の経験を今までする機会がなかった。「叔母」も「私」と同様に「子ども」がいなくとも思われるものの、「私」を精神的にも物質的にも支える機会があり「保護者的役割」の経験をしてきている。

「子ども」がおらず、「就労」している（いた）という点において、「私」と「叔母」の両者は当時の一般的な「家制度」

から逸脱した人物であるという共通点を持つが、「保護者的役割」の経験の有無においては両者に差異があることが分かる。

この「叔母」と類似点を持つ女性は現実にかの子の周囲にも存在していた。それはかの子の近親の未亡人「つる」である。「つる」は薩摩藩の祐筆（文書を司る人）の妹で、御殿女中も勤めた経験を持つ人物である。年譜によると、一八九四年からかの子は両親と別れて伯父の邸内別邸にて暮らすことになった。「つる」は養育母としてその家にかの子と共に住み、琴や舞踊、書道等の教育を行ったとされる。加えて「つる」は「かの子に厚化粧をほどこし、周囲の女中たちにも、かの子を『ひいさま』と呼ばせ偶像あつかいした。」と年譜には記されている。「河明り」における「叔母」も「私」が「娘」の家へ向かう際に、「いそいそと土産ものと車を用意して呉れた」り甲斐甲斐しく世話を焼いたりしている。このように、豊かな教養を持ちかの子に丁寧なお世話を行った「つる」は、「河明り」における「叔母」と共通点があると言える。

「河明り」内の「叔母」と「つる」だけではなく、「私」とかの子本人にも共通点がある。「河明り」の「私」は作家であり、「東洋の哲学」を行う人物であることが作中にて示されている。この点はおかの子本人とも共通している。さらに、作品後半に「私」が向かうシンガポールはかの子も一九二九年二月一日・一九日にヨーロッパ遊学への途次に立ち寄っている。このような共通点から「私」はかの子を彷彿とさせる人物設定であると言える。このようにかの子の経験とも本作品はつながりがあると言える。

さて、作品内部へと再度話は戻り「叔母」と「私」の関係性を確認する。「私」は「（叔母との）口争いは、しじゅうあることだし、そして、私を溺愛する叔母であることを知ればこそ、苦笑しながらも、それを有難いと思って」いる。そして子供を産み育て、家を存続させるという「家制度」からは逸脱しているという共通点を「叔母」と「私」は持つ。

そのような両者の関係は、まるで母が娘へと精神的にも物理的にも援助するような近い関係であると言える。一方で、「私」の実際の「母」は本作において全く描かれていない。これは「娘」や木下の「母」については詳細まで描かれていることと比べても注目すべき点である。<sup>(9)</sup>

それでは何故、「母」ではなく「叔母」からの援助が「私」には必要だったのだろうか。それは、文筆家という「労働者」である「私」を支援する人物が、「母」すなわち「家制度」の内側にいる人物ではそぐわなかったからだと考えられる。言い換えれば「労働」への積極的支援を行うということは、「家制度」からの逸脱を働きかけることと同義であり、それを「家制度」の内部にいる母が娘へと行うというのは考えにくい。加藤秀一は「仕事」か「家庭」かの選択を女性にせまられ、「主婦」と「働く女」は互いに敵対する要素となると述べている。<sup>(10)</sup> そのため、「私」への援助者は「家庭」を選択している「母」ではなく、「子」や「夫」を持たないがゆえに積極的に「家」を守る存在ではない「叔母」へと関係をずらしたと考えられる。加えて「叔母」も以前は藩校夫人の「女秘書」でありつまりは「労働者」であったことも、作家という同じ「労働者」へ援助を行うものとして適任であったと言える、加藤秀一は女性の賃労働者はあくまで「主婦」的な、つまりは看護や世話・しつけといった伝統的に女性の性役割とされてきたものの延長線上に偏っていることも指摘している。<sup>(11)</sup> これを踏まえると「叔母」が以前就いていた藩侯夫人の「女秘書」も、女性に扶助的な役割を求めた仕事であったことに気付く。つまりは就労していた「叔母」ではあるが、それはあくまで女性に限定的に開かれた職業だったと言える。ゆえに「私」と「叔母」を比べると、自身の労働をメインとする「作家」と他者へのサポートを行う「女秘書」とでは違いがあり、「叔母」のほうがより扶助的な立場にあったと言える。

言い換えると、加藤の述べる「主婦」と「労働者」の軸で考えた場合、「叔母」は「私」よりも「主婦」軸寄りの立場であると言えよう。<sup>(12)</sup> これは、「私」と「叔母」の価値観を比較した場合、「叔母」は「私」が結婚しないことに対し

て当初嘆いていた点からも、「叔母」の方が「私」よりも「家」への執着があることにも表れている。

しかしここで注意しておきたい点がある。当時としては「家制度」の外側に属している「私」と「叔母」であるが、両者ともに「私」が「生家直系」であることには執着しており、「家制度」への意識があるという点である。特に、「叔母」は「家の存続」という観点から「私」が「結婚」することを本来は望んでいた。あくまで「結婚」の代替案として、執筆での成功を期待しており、「叔母」は「私」と比べても「家の存続」という意識が強い。このように、「せめて文筆の道で、生家の名跡を遺さしたい」という点に重きを置いている「叔母」に対して、「私」自身は「子供」や結婚といった当時の一般的な女性が望むようなものには関心を示さず「文筆」そのものへ執着している。このことからあくまで「私」は「女性作家」としてより良い作品を生みだすことを渴望し、また社会的にも成果を示したいという「働く女」すなわち「労働者」としての立場を選択していると言える。

### 三、「娘」の「女性性」

「私」は「女性作家」として「娘」に関心を寄せ、河岸の家へと出入りし創作のヒントを得ようと試みる。しかしながら「私」は宴会あがりしてきた若い芸妓二人には「さすがに話術を鍛えた近頃の下町の芸妓の話は、巧まらずして面白かったが、自分の差当りの作品への焦慮からこんな話を喜んで聞いているほど、作家の心から遊離していいものかどうか、私の興味は臆しながら」と作家としてあまり関心をもたない。

だが、許嫁である木下の話を「娘」が話し出すのを見た「私」は、「この娘に今まで見落していたものを見出して来



たような気がした。」と別の面があることに気付く。そして三・四日川沿いの部屋に行くのをやめ、「娘」たちから距離を取るのであった。その理由として「私」は「娘やそのほか妙なことから影響で、妨げられるのが、何か不服に思えて来たからである。」と考えており相手から接近されることを避けているのが分かる。前述のように「私」は「作家」としての自負があるものの、他者から「作家」として規定されたり、接近されたりするのを好まないことがこの場面で示されている。このような「私」の一面は「叔母」とのやりとりの中でも見られる。

「あすこの家へ行くと、すっかり分別臭い年寄りにされて仕舞うから……」

これは、「娘」の父が「私」が「何事もご承知の筆をお執りになる方」であれば「娘」と木下の確執を解消できるかもしれないと頼った後、「私」が「叔母」にこぼした言葉である。その後もこのような「私」のあり方は続き、あくまで自身の関心の赴くままに交流することを望み、「私」は扶助的な役割を担うことは好まないとと言える。

しかし「私」は四・五日休んだあと「娘」からの誘いを受け、「川沿いの家の人事に絡み込まれるのを危うく感じ」ながらも、結局は下町の「生活内部を覗くことに興味が弾」み、「娘」のところへ赴くのであった。そして再度「娘」と会い彼女の事情ありげな様子から「またしてもこの家の人事に巻き込まれる危険」を感じながらも、老主人の頼みを受け「娘」と「娘」の許嫁との関係を取り持つこととなる。

「私」は面倒ごとに関わる煩わしさを感じつつも、それ以上に「娘」への関心が勝り、「娘」と木下をシンガポールにて引き合わせる段取りを行うのであった。こうして「私」は「娘」と関わりあう中で「娘」を扶助的に支援する「保護者的役割」も引き受けていく。つまりは二節で述べた「主婦」と「働く女」という軸において「私」は「主婦」側

へと多少動きを見せるのである。この「娘」に対する「私」の「保護者的役割」は、「私」から見た場合における「叔母」の支援、ひいては「保護者的役割」と類似している。これは、実の母娘でないにしろ「娘」を成長させ次の母娘関係を再生産していると言えよう。<sup>13</sup>

「私」は「娘」を知るうちに彼女の男性的要素の強さは彼女の従来からの好学的な肌合いと、許嫁である木下の「どうか、あなたが今よりも女臭くならないように……」という言葉の二点に由来するものだと分かる。

特に一点目の「娘」の「好学的な肌合い」に関しては作中にて念入りに描かれている。作中の「娘」の発言から「女子大学」在学中に東京の河に興味を持ち友達と研究をしていたことがわかる。そして「娘」の通っていた「女子大学」は、学者との付き合いの場面にて「娘は目白の学校への往復」という記述があることから「日本女子大学」であると推察される。「日本女子大学」といえば、平塚らいてうを輩出した学校であり、創立者である成瀬仁蔵の「女子を先ず人として、第二に婦人として、第三に国民として教育する。この順序を間違えてはならない。」という信念のもとに設立された大学<sup>14</sup>である。当時、高等教育を受ける女性は非常に限られていたことを踏まえるとこれらはやはり意図的な設定だと言える。加えて、老主人の「この娘が一時どういう気か学者になるなぞと申して」という発言から、「娘」は一時期「学者」志望であったという好学心の強さも描かれている。

そして「娘」から「慎しく語ろうと気をつけている言葉の端々に関東ローム層とか、第三紀層とかいう専門語が女学校程度の智識でない口慣れた滑らかさでうっかり洩れ出す」のを見た「私」は、「娘」がこの分野で何かしら学んだ経験があることに気づく。そこから「私」は「あなた男なら学者にもなれる頭持つてるかも知れないのね」と「娘」の可能性を見出している。このように「娘」は従来の気質に加えて、木下の「女臭くならないように」という要望からより「女」としての要素が薄くなっていると言えるだろう。

ここで「娘」の性質が木下に沿っていくような元々「女性らしい」面があるのではないかという指摘もあるかもしれない。しかし、シンガポールにおける「娘」の描写をみると

茶絹のシャツを着、肉色の股引を穿いて、店では店の若い者に交り、河では水揚げ帳を持って、荷夫を指揮していた娘を想い出した。そして、この捌けて男慣れのした様子は、あまりに易々としたところを見せているので、私はまたこれが娘の天成であって

うんぬんとあり、捌けて男慣れした快活さは「娘の天成」のものとして描いていると言えるだろう<sup>(16)</sup>。加えて、物語後半部分のシンガポールにおける木下の告白場面はかの子の推敲前後で表現が異なっている。現存する原稿から読み取れる推敲前後の文章を比較すると

(推敲前) でも、そういふ癖をあの娘から引き出しはしないだろうか、

(推敲後) でも、却って母親達のような女臭さをあの娘に植えつけは仕ないだろうか――

(推敲前) 女の同じ癖を呼び起こして

(推敲後) 女の根生になつて

というように、「推敲前」では「娘」に女の要素が眠っているのが分かる表現となっている。しかし「推敲後」では女

の要素が後々植えつけられたり、変化し生じる可能性があるという表現に変わっている。つまりは、木下の目から見て、「娘」は女の要素が従来からあまりないということ<sup>(17)</sup>を強調したいかの子側の意図があるといえる。

#### 四、「私」と「娘」の「一体化」そして「決別」

シンガポールにて出会った木下の態度は「娘」に事前に聞いていたものより好意的に変化していた。その理由はシンガポールという異郷の開放的な地であることに加え、それ以上に木下と「娘」の間に「私」が介在しているからこそ達成されたものであった。この木下の態度の変化は、「私」が手紙と電報にて木下に話をつけた時点から見られる。

私は娘の身の上を引き受けてから、若い店員と話をつける手段を進めた。丁度ボルネオの沿岸を航行していた船の若い店員に手紙と電報で事情の経緯を簡単に述べ、あらためて、私が仲に立つ旨を云い遣ると、店員からは案外喜んだ承諾の返事が来て、但、いま船は暹羅の塩魚を蘭領印度に運ぶために船をチャーターされているから船も帰せないし、自分も脱けられない。新嘉坡なら都合出来る。見物がてら、ぜひそこへ来て貰い度いと、寧ろ向うから懇請するような文意でもあった。

ここでの木下の会うことへの積極的な姿勢は従来の態度とは異なる。その原因として以下の三点が考えられる。一点目は宮内淳子が指摘しているように<sup>(18)</sup>、「南洋」という土地の特殊性により女に対する先入観や固定観念が和らいだ

という点である。これは木下が南洋での「この絢爛な退屈を何十度となく繰り返し返しているうちに、僕はいつの間にか、娘のことを考えれば、何となく微笑が泛べられるように悠揚とした気になって来ました」と述べていることから確かに言えるだろう。二点目にこの場面での情報伝達が「手紙」や「電報」という「文字」によるものであり、「人」対「人」といった直接的なやりとりではなく物理的距離のあるやりとりだった点が考えられる。三点目に木下と「娘」の関わり方が、「仲介者」として「私」が間に入ることに変化が生まれた点である。木下と「娘」の再会の場面を見ると、木下は「ご尤もです。しかし、僕自身の気持ちですが、僕にはつきり判ったのも、矢張りあなたが仲に入られたお陰なんです。」と述べている。このように、木下と「娘」の間に「私」が介在するようになったことが木下の態度の変化としては大きな要因だったと言える。

木下の「あの娘は好きだが、あの娘も女だ。あの娘も女だという事が気に入らない。」という言葉に表れているように、木下は幼少期の経験から「娘」が女であるということがなかなか受け入れられず、その結果、わだかまりを残していたと言える。

しかし木下の母親との確執の告白を「娘」の代わりに「私」が引き受けることで、木下が危惧していた「母親達のような女臭さ」を「娘」に植え付けることも回避することができた。併せて木下は自身のわだかまりを「私」に告白することで精神的負担をゆだねることができ、そして「娘」の女の要素を強くすることなく、木下は「娘」との結婚に踏み出すことができたのである。

木下が出生に関わる告白を「私」に行う決心をしたのは、「今までの話、僕はあなたにお目にかかってどうしても聞いて頂き度くなつた」という言葉から実際に「私」と会ってからということになる。これは作中にて「私はこの真摯な青年の私に対する信頼に対して、もはや充分了解が出来」とあるように、実際に会うことで生じた木下の「私」へ

の「信頼」によるものだと分かる。

「私」が「娘」の代理として木下の告白を受け止めることができたのも、「私」自身が「女」であり「娘」への深い理解を持ち合わせていたからだと言える。「私」の「娘」との距離の近さはシンガポールに行く前の老主人との会話の場面でも描かれている。老主人は「私」に対して「これを妹とも思召し下すつて、叱つても頂き、お引立てもお願いいたし度い」と発言している。つまり「私」が「娘」に対して、実の姉のように率直な助言をすることを老主人は求めているのだ。「娘」自身も老主人とともに「私」と会った際には「娘の姿態は姉に対する妹のようにしおらしく」なっていた。これは「私」と「叔母」の関係よりも「私」と「娘」の関係のほうがより近い年代同士の扶助者であることを示しているといえよう。

そして「私」の「娘」への理解に関しては、シンガポールにて「娘」が木下に会う前に雑誌社の社長や事務員たちと呑んでいる場面にて如実に表れている。

こういうことを考え廻らしている間に、憐な気持ち、嫉妬らしい気持ち、救ってやり度い気持ち、慰めてやりたい気持ち、詰ってやり度い気持ち、押し捉まえてやり度い気持ち、その男に対してふいふいと湧き出して来て、少し胸が苦しいくらいになる。恐らくこれは当事者の娘が考えたり、感じねばならないことだろうにと、私は私の心の変態の働きに、極力用心しながら室内の娘を見ると、いよいよ鮮かに何の屈託もない様子で、歌留多の札を配っている。

あくまでも「私」からの視点ではあるが、この場面では「私」は当事者の「娘」以上に木下へ様々な願望を抱いている。

本来は「娘」がそれらを抱くべきものとして考え、「私」はこの様々な心の動きを抑えようとしている。この部分に関して宮内淳子は「愛の悩み」を託されたはずの「私」が今度は娘の愛に自分の「甘苦い哀愁」を託す——つまり託す・託される、施す・施されるといった一方通行が無効となつていふのだと述べている。<sup>(19)</sup> ここにおいて「娘」と「私」は、相互に融通するような極めて密接な関係にあつたことは間違いない。「娘」と「私」の心理的距離はかなり近づいていた上、「あの女は、自分の愛の悩みをさえ、奴隷に代わつてさせるという世にも珍しいサルタンのような性質を持つてゐる女なのではあるまいか。」と本文にあるところから、「愛の悩み」をそれぞれ「負う」「負わせる」という、相互に作用する関係が示されていると言へる。言い換えると「娘」と「私」の間の心理状態は相互に作用するような「一体化」した関係であると言えるだろう。その後の木下と「娘」の再会の場面においても、そのような心の動きが見られる。

私はふと気がつく、娘と男から離れて、独り取り残された気持ちが出た。こちらから望んで世話に乗り出したくらいだから、利用されたというような悪毒く僻んだ気持ちはしないまでも、ただわけもなく寂しい感じが沁々と襲つた。——この美しい娘はもう私に頼る必要はなくなつた。——しかし、私はどんな感情が起つて不意に私を妨げるにしても自分の引受けた若い二人に対する仕事だけは捗取らせなくてはならないのである。

このように「私」が「寂しさ」や「娘」と木下から「取り残された気持ち」や、「娘」が「私」を頼る必要のなくなつたことに対する「喪失感」を抱いていることについて色濃く描かれている。この場面にて多大な「喪失感」があることから、これより前の場面では「私」と「娘」は極めて密着した状態であつたと言へる。

これほどまでに「私」は「娘」と重なり合つた状態であつたため、木下にとつても「娘」の「代理」として母たち

との確執を受け止めてもらう存在として「私」は適していたのだと言える。そして「娘」が「もう私に頼る必要はなくなつた。」とあるように、告白を受け止めた「私」は「娘」を支援する「保護者的役割」からも降りるのであつた。そして「私」はより「働く女」の方へ軸足を戻すのである。加えて「私」が木下から「作家」として、「人間の悩みを原料として、いつかそれを見事に再生産」することへの期待されているのも、「働く女」としての役割が再度与えられたと見なすことが出来よう。「私」自身も「虫の好い解釈」と木下に皮肉めいたことを云いながらも好感を持って受け止めていることから、それが良い経験だつたと捉えていることがわかる。

## 五、終わりに

物語終盤にて「この家の娘への関心は、私に取って一時の岐路であつた。私の初め計画した物語の娘の創造こそ私の行くべき本道である。」とあるように、「娘」と木下の結婚が確実となると「私」の「娘」への関心は落ち着き、自身の作家としての道に力を入れていくとしている。しかし「私」はシンガポールで「娘」と重なりあつた関係として木下の告白を受け止めた結果、自分が経験することのなかつた「結婚」という別の人生の選択をも追体験することができたと考えられる。

他方でそこに至るまでに「娘」と交流を深める中で、「娘」が男であれば「学者」になれるような能力があると見出したり、「娘」の木下への思いの強さから海外まで仲を取り持ちに行ったりするなど「娘」の自己実現に対して「保護者」のような立場から働きかけを行っている。その結果「娘」の希望に沿って結婚への道を援助するかたちとなつた。



この年少者を支援する「私」と「娘」の関係は「叔母」と「私」の関係に類似している。子どもがおらず、周囲の年少者との関わりが比較的薄い「私」であったが、この一件により「保護者的役割」を経験することもできたと言える。

「岐路」という記述からして「娘」とその後の道は分かれたものの、そこでの「保護者的役割」の経験並びに別の人生の追体験こそが、小説末尾で述べられている『河』に対するとき、水に対する私の感じ」を変えるきっかけとなつたといえる。そのような新たな認識を得たことから、手掛けていた小説に関して「娘の性格の更生」だけではなく、一からその物語を書き直すための土台が出来たのであろう。

これは「河明り」の物語冒頭においては「主要人物の娘の性格に何か足りないものがあるので」云々というようにあくまで作品全体を書き直す想定はしておらず、娘の性格に何か要素を付けたす程度の変更をする予定だったことと比べると、作品の執筆への意識が根本から異なってきたことが分かる。その後も芸妓や「娘」と過こしている最中では、まだ「自分の差当りの作品への焦慮」云々と表現されていることから、あくまで当初の設定にこだわり作品を一から書き直すつもりがその時点でもなかったことが分かる。やはり「娘」との関わりによって得られたものがあり、その結果娘の性格だけではなく作品全体まで書き換える必要があると「私」は気づいたのである。

尚その部分は原稿と初出および単行本における本文の異同ちがひが見られるが、より一から物語を書き直すということを経験している現存する原稿の「結局、私は私の物語の娘の性格の更生に、始めから私の物語を書き直す決意にまで、私の勇気を立至らしめたのである。」という表現がより適していると言える。

「私」は「娘」の代理として木下に結婚への働きかけを行うことができた。そして「娘」の代理ということは「私」にとっても「娘」が自己に類したものと見え、自身のなし得なかった「結婚」を間接的に経験できたのだと言える。利他的にも見える「私」であるがこの川辺の家の一件により、最終的には結婚する「娘」と自身が異なる道を進むことがよ

り明確となり、併せて母のような「保護者的役割」を一度は経験するもそれらを捨てる決意を固めるに至った。先述した通り、「私」は「娘」を通して様々な「人生の選択肢」の存在を再認識している。その結果、多くの選択肢の中でも他のそれらから決別し「女性作家」という自らの設定した目的のために「働く女」として物語を生み出すことにひたと向かう姿勢を改めて示したものととして、本作を捉えたい。

(1) 第八創作集『河明り』（一九三九年六月、創元社刊）収録。なお本論での引用は全て、『岡本かの子全集』六（筑摩書房、一九九三年）から行った。

(2) 主に近年発表の論を以下に挙げる。

宮内淳子は「岡本かの子『河明り』―その「南」への志向について」（『日本文学』三八巻・一九八九年九月）にて、本作における「南」への移動の考察を行っている。作品内の「南進」してきた人々の中に「国策」として「南進」してきたものがないことを指摘し、「龍宮」伝説を元にして行きずりの人々の無限の相互関係性を描いていると示している。その点から、大乘仏教の「空」の思想を描いているとし、宗教小説としての側面を論じている。

同様の観点から野田直恵が「岡本かの子『河明り』の『目的』（『國文學論叢』四九巻・二〇〇四年二月）にてかの子の他作品「東海道五三次」（『新日本』一九三八年八月号初出、第六創作集『老妓抄』（中央公論、一九三九年三月）収録）との関連を挙げながら「河明り」は仏典の姿を感じさせずに、人生のあり方を観照させることを目指した作品と指摘した。外村彰も『河明り』―我執から包容へ―（『立命館文学』二〇〇二年七月）にて、物語の進行にあわせ、南海の自然がもたらす忘我により作品内の人々の人間性も回復していくことから、個々の屈託した人物の更生を主題にしていると示した。

(3) 山崎真紀子は「岡本かの子『河明り』論」（『続・岡本かの子作品の諸相』専修大学大学院畑研究室、一九九六年六月）にて私が孤独を受け入れ、〈書く〉行為を再認識する物語として論じている。

(4) 高良留美子は「岡本かの子『母子叙情』から『河明り』へ」（『神奈川大学評論叢書』一九九三年六月）にて「娘」と木下の関わりから、「私」が描く作品内の「娘」が家父長制家族から自由を目指すものへと繋がっていくと指摘している。

(5) 加えて「私」を除く主要人物の母については、詳細が描かれている点も特筆すべきである。「娘」は「二歳のとき母に死に訣れてから、病身で昔ものの父一人に育てられ」という記載がありながらも、「娘」が自身の好学的な性質の由来について「……私の母が妙な母でした。漢文と俳句が好きで、それなのに常盤津の名取りでしたし、築地のサンマー英語学校の優等生でしたり……」と述べており「母」からの影響がうかがえる。そして「英語学校」「常盤津の名取り」という設定は、かの子の母「アイ」との共通が見られる。「アイ」に関しては、かの子自身が「わが『血統診断書』―源氏の末裔(一九三八年五月二四日『都新聞』)初出。冬樹社版『岡本かの子全集』(一九七四年)一九七八年)初収録。」にて「父の気性と教育を受けたものか寛闊と共に素朴そのものでありながら一脈字問筋の通った女であった。面白いこととはこの古典風なところにモダン趣味性が異様に混じっていた。母は横浜英学校の卒業生であり常盤津の名取だった。」と述べている。

木下においても「堺屋の母」と「産みの母」に関する記述は多くあり、それらが木下の女性への不信感の形成に影響を与えている。  
 (6) 「美少年」(初出未詳。創作集『鮎』(改造社、一九四一年)収録。)にて、幼少期の岡本一平とかの子を元にした人物と推測される時春ととく子のやりとりを類した記述が見られる。

あの女は恋とか愛とかには全然興味をかけない生活にのみかまける素質に生れ附いた女なのだ。少女であれ、同性の洞察力を働かすことによつてわたしにはすぐ判る。

このように同性であるがゆえに、その女性の素質に気付くことができるという考えが示されている。

同様に「花は勁し」(『文藝春秋』一九三七年六月号初出。第三創作集『母子叙情』(創元社、一九三七年)収録)における、バーナード・ショウの「セント・ジョン」の一般的な批評は「仏蘭西の聖少女を痛快に揶揄した」と示されていたが、桂子は「聖少女がこの著者の氣持よげに薙ぎ廻す皮肉の刃を、身に遣り過して一つも傷をとどめない不逞の正体を感じ取った。」と考えており、その後には「女には女の観る女の正体がある。」と続いている。このように「女」同士であるからこそ他の「女」の本質を見抜くことが可能であるという意識がかの子作品には度々表れていると言えるだろう。

(7) このような「私」と類似した人物として「金魚撩乱」(『中央公論』一九三七年十月号初出。第五創作集『巴里祭』(青木書房、一九三八年十一月)収録。)における復一が挙げられる。「私」と同様に復一も「僕は家内も要らなければ、子孫を遺す気もありません。」と女性と関係はもつものの家庭を築こうとはしなかった。また復一の両親は夫婦養子であり金魚屋の当主としては復一こそがふさわしい

と育て親である宗十郎は述べており、彼が生家の直系であることが作中にて表現されている。ただ復一は「私」とは異なりその点に関して特に意識している描写がないのも特筆すべき点ではある。

(8) 小宮忠彦「岡本かの子年譜」『岡本かの子全集』十二(筑摩書房、一九九四年)収録。

(9) 註5参照。

(10) 加藤秀一『性現象論 差異とセクシュアリティの社会学』一七二頁(勁草書房、一九九八年)

(11) 註10前掲書一七二頁参照。

(12) 註10前掲書一六九頁参照。ここでは「女」であり、性的に中立であるはずの職場においてさえ、つねに「女」という意味が付随すると加藤は指摘している。かの子に関する同時代評をみると初期は「女流作家」という枠組みにて他の女性作家と共に評されていた。「女」であることと「作家」であることがかの子自身においても結びついてきた可能性がある。

(13) 「家制度」の外の女性が、より若い女性に「職業婦人」への道を援助するかの子の作品として「蕩の門」(『むらさき』一九三八年一月号初出、第六創作集『老妓抄』(中央公論社、一九三九年三月)収録。)が挙げられる。老婢まきは二度の結婚に失敗し「私」の家に奉公しながら、近所に住む、父母を早々に亡くしたひろ子に対して進学のための資金援助をしている。

自分の体験から、貧しい女は是非腕に一人前の専門的職業の技倆を持つていなければ結婚するにしろ、独身にしろ、不幸であること  
を諄々と諭して、ひろ子に看護婦になることを勧めた。そして学費の足しにと自分(注・まき)のお給金の中から幾らかの金を貢ぎ  
ながら、ひろ子を赤十字へ入れて勉強させた

「老妓抄」(『中央公論』一九三八年十一月初出、第六創作集『老妓抄』(中央公論社、一九三九年三月)収録。)の老妓である平出園子も永年の辛苦で一通りの財産も出来たあとは「遠縁の子供を貰って、養女にして女学校へ通わせ」ている。

親族としての「叔母」「伯母」はかの子の他作品にも散見される。中でも作家の援助をする「おば」は「鶴は病みき」(『文学界』一九三六年六月号初出、第一創作集『鶴は病みき』(信正社、一九三六年十月)収録。)にて「私」の鎌倉旅行に同行する「五十近くでなりふりなど古風で常識的」な感性の鋭い「伯母」と、「雛妓」(『日本評論』一九三九年五月号初出、第八創作集『河明り』(創元社、一九三九年六月)収録。)にて「わたくしを後援し出した伯母と称する遠縁の婦人」が挙げられる。

「勝ずば」(『新女苑』一九三七年十二月号初出、冬樹出版『岡本かの子全集』(一九七四年〜一九七八年)初収録)においても病弱な政

枝を援助し支える「叔母」多可子が登場する。「うちには子供が無さそうだから、あんたをうちの子にして来年から女学校へ上げてあげますよ」といった精神的援助に加え金銭的援助も行っている。また「そうして陰性な母よりも、貧乏で利己主義な父よりも、無性格のよりに弱い姉よりもずっと頼母しく自分を愛して呉れる叔母の愛撫のなかで今一度少女の幸福を味わってから死んで行き度い。」と政枝の心情が描かれており、作品内の描写から父母以上の存在として強く描かれていることがわかる。このように「年長者の女性」からの「就労」や「就学」支援はかの子作品に散見される。

(14) 日本女子大学公式サイト (<https://www.jwu.ac.jp/univ/about/history/founder.html>) (二〇二二年五月二十日最終アクセス)

(15) 加えてかの子が女らしさを描くことについて苦心していることは同時代のかの子の随筆からもうかがえる。「女流作家論」(昭和一三年一〇月二四日『帝国大学新聞』初出。第五随筆集『池に向いて』〔古今書院、一九四〇年一月〕収録。)には次のような言及がある。

逆に、この常識を職業的に意識して、強いて女らしい面を描きだそうとするのも女流作家の弱い一面である。女らしいものというのは女自体に於て定まっているものではなく、定めてしまえばそれはもう女の醜態や女のエゲツナイ方面とかのみを強調したものは、男がそうであるだろう。そうあつて貰い度いと望んでいる猟奇的な眼へ向かつて逃れのポーズをわざと取ったようなもので、却つてそこに女はいない。

つまりここでは女らしい面を意識して書くこととするあまり「女らしさ」がこのようなものであると定めてしまうこととなり、型にはまつた誇張表現になるおそれがあると示している。その結果、本来の自然な女性らしさを描くことができないとしている。ここではあくまで「女性らしさ」というものをかの子が意識して「描かないようにした」という事実には重きを置き、論を進めていきたい。

(16) 校異に関しては、外村彰「岡本かの子『河明り』定稿校異」(『京都学園高校論集』三〇号二〇〇〇年十一月)を参照した。現存する「河明り」校正刷り用の原稿は、現在川崎市市民ミュージアムが所蔵している。外村彰は、原稿には浄書の筆跡の上に推敲が施されており、それらの筆跡が異なっていると述べている。原稿の浄書を行ったものは新田亀三もしくは恒松安生のどちらかとし、推敲した者はいかの子自身ではないかという見解を外村彰は示している。なお本論の引用にて使用した筑摩書房版『岡本かの子全集』では「推敲後」の文章が採用されている。

(17) 註 6にて引用している「美少年」の一文においても、「あの女は恋とか愛とかには全然興味をかけない生活にのみかまける素質に生まれ附いた女なのだ」とあり、かの子自身生まれもつての性質に重きをおいていると言える。

(18) 宮内淳子「岡本かの子『河明り』―その『南』への志向について」(註2前掲)

(19) 註18に同じ。

(20) 「雛妓」(『日本評論』一九三九年五月号初出。第八創作集『河明り』(創元社、一九三九年六月)収録。)における作家かの子と雛妓かの子の関係も「河明り」の「私」と「娘」に類した関係と言える。「雛妓」において作家かの子と雛妓かの子は互いの名前を呼び合うことで「一体化」を表現している。作家かの子は雛妓かの子に支援を行おうとするも、雛妓が距離をとったことから関係は終わる。両者が決別することで、作家かの子はより文筆の道へと邁進することを決意する。「雛妓」における「意気地なしの小娘。よし、おまえの若さは貰った。わたしはこれを使って、ついにおまえをわたしの娘にし得なかつた人生の何物かに向って闘いを挑むだろう。おまえは分限に応じて平凡に生きよ。」という箇所は、「河明り」における「この家の娘への関心は、私にとって一時の岐路であった。私の初め計劃した物語の娘の創造こそ私の行くべき本道である。」と同義のものであると言える。

(21) 本文の異同内容は、小宮忠彦「解題」『岡本かの子全集六』(筑摩書房、一九九三年)を参照。

(原稿) 結局、私は私の物語の娘の性格の更生に、始めから私の物語を書き直す決意にまで、私の勇気を立至らしめたのである。  
(初出誌及び単行本) 結局、私は私の物語を書き直す決意にまで、私の勇気を立至らしめたのである。

このように雑誌発表段階では、「の娘の性格の更生に、始めから」という部分が抜け落ちている。印刷校正の段階のミスと考えられており、冬樹社版『岡本かの子全集』筑摩書房版『岡本かの子全集』共に原稿段階の文章を採用している。